

第4回 校内研究夏季研修会①

◎計画訪問時の算数 事後研報告

【低学年 1-1 田宮先生の授業】

- ペアでの関わらせ方、大変良かった。こうした意図的な関わりを持たせることで、次学年へとつながっていく。
- 授業の流れとして、本校の「しる段階」で、教えると言いながらも、子どもたちは考えていた。低学年での教えるとは、前時との場面の違いや前時の復習でもいいのではないか。(本校の子どもたちの実態から)
- 「考えさせる場面」のくじの問題について、事後では意見が2つに分かれた。一つは、まるなげ(子どもたちに任せる)でもよかったのではないかとということと実感させてからがよかったのではないのかということ。
- めざす子どもの姿として、何ができたら○なのか、評価規準を明確にして授業を構成していかなければならない。
- 教えることが、ていねいすぎなかったか。ただし、ていねいに扱わないと、ついて来れない子もいる。この辺が難しい。(時間的な問題、内容「何を教えるのか」の問題のバランス)考えることを充実させるための「必要最低限の教え」でありたい。

【中学年 4-1 渡辺先生の授業】

- 感動のある授業ということで、15度ずつ変化していく規則性を発見する部分で子どもが輝いた。
- 考える時間が10分程度と短かったので、もっと時間をあげたかった。その中でも、子どもたちは一生懸命考え、発表しようとしていた。
- 教えることとしては、①新しいこと②既習事項の確認③やり方の説明あたりだが、どうしても長くなってしまう。このことにより考える時間が圧迫されているので、教える部分をコンパクトにすべきであろう。
- 考えさせて、学びを定着させたいとするならば、「何を」考えさせるのか、どういう学び合いの姿を求めるのか、からさかのぼって教える部分を最小限度にできるのではないだろうか。
- 本校のスタイルとちょっと変わるかもしれないが、教えて、考えさせて、教えるということも必要かもしれない。

【高学年 5-1 土田先生の授業】

- 教えることをできるだけコンパクトにし、考える時間を十分に確保できていた。教える段階をコンパクトにできたのは、しっかりと予習(わかるわからないに関わらず)し、子どもたちに、今日学習することは何なのかという構えができていたから、教師の説明を自分なりに咀嚼して考えながら聞いていたことに起因しているのではないだろうか。予習は、わからないことをわかりたいという思いを持たせるためのもので、引き続き大事にしていきたい。
- 子どもたちに力がついてきている。説明の時に、図だけでなく、色分けなども工夫して、友達にわかりやすく説明しようとしていた。

○考えるツールとなったのは、対角線である。対角線をひくことでどんな多角形も三角形になるということ。目の前の子どもの実態に即していたのではないか。ただし、自由な発想をなくしていくような方向には行かないようにしていきたい。

○本時では、対角線の他に、補助の点を打つことでも求められる。こうした多様な考えを奪ってはならない。この補助点を打つという考えは次時で扱ったが、やはり混乱が生じたということだった。最後は納得という形で収まったが、まるまる一時間使ってしまったとのこと。低位の子の確かな定着と上位の子を伸ばすという、バランスが必要である。(1時間の中では難しいので、単元を通してなど)

【全体での確認事項】

○予習の大切さ。しかしながら、低学年では難しいという実態もある。教える段階のさらなる厳選と工夫がひつようである。(もちろん、中・高学年でも)

それは、時間的に、教える段階をコンパクトにする一つの手立てでもある。

○教えることの厳選化、授業後半の考える部分につながるようなものを厳選していく。

○たしかめるとは、教師の教えたことがどのくらい理解できたかをチェックするということ。みんながわかるまできちんと確かめるという意味合いではない。授業後半の考えることを通して、スパイラルに、教えたことが理解できていくようにしていく。

○考える時間を十分に確保していく。どんな学び合いの姿を目指すのか、何を考えさせたいのか、そこから教えることの厳選に結び付けていく。

○ふり返る視点を明確にさせていく。これは本時だけでなく、日々の授業の中で、価値あるふりかえりなどを紹介していくことで、育てていく。気づかせていく。

◎研修 <3年算数 繰り上がりのあるかけ算の筆算>

- ・低・中・高学年ブロックに分かれ、本時の指導案を作成し、比較検討
- ・その後、同じ場面の「教えて考えさせる授業」のDVDを視聴。

